

コラム

戸倉先生のデルマトオーケストラに感動！

宮地良樹先生ご編集の本(皮膚疾患ベスト治療：臨床決断の戦略・エビデンス，学研メディカル秀潤社)の書評を書かせていただく機会があり，皮膚科学の営みを音楽演奏に喩え，「指揮者・宮地良樹と全日本スキン・フィルハーモニー管弦楽団の交響曲「エビデンスとベスト」というタイトルで書かせていただいた(皮膚アレルギーフロンティア2016.7 VOL.14 NO.2, p.97)．ちょうどその矢先，浜松医科大学の戸倉先生が，今年の第80回日本皮膚科学会東部支部総会(10月29～30日)のテーマを「デルマトオーケストラ」とされ，リアルにコンサートも開かれるという。「なんというシンクロニシティ(同時性)か」と思い，家内ともども拝聴に行った。

演奏者は現役皮膚科医を中心としたメンバーだという。音楽好きの方々による，誰でも知っているような名曲の「さわり」を演奏するホームコンサートくらいを想定していたのだが，予想はみごとに裏切られた！モーツァルトの交響曲第40番1楽章と4楽章(アンコール)，さらにシューベルトの交響曲第5番全曲という，大作が演奏されたのである！

憂鬱さと過度の緊張が交錯する，「双極性障害の暴れ馬」みたいなモーツァルトの40番第1楽章には圧倒された。戸倉先生は「アマチュアではなく，せめてセミプロを目指したい」とおっしゃっていたが，とんでもない！まさにプロそのものの演奏

であった！

その余韻も覚めやらぬまま，続いてシューベルトの5番。シューベルトファンならともかく，クラシック好きな人でもあまり聞き込んでいない曲だ。「こんなむずかしい選曲でいいのか？ 戸倉先生！」と叫びかけたが，見事に聞かせてくれた。ロマン派というより古典派的な典雅な曲だが，各パートの出番のバランスがよく，心に染み入る演奏だった。戸倉先生のフルートも堪能で，大阪市立大学・鶴田先生のホルンもよく響いていた。聞くとところによると，鶴田先生は練習のため唇が腫れて夕食も摂れなかったらしい。

やはり音楽は素晴らしい！ 楽譜は，音符の関係を示すものでしかないが，そこからメロディ・リズム・ハーモニーを抽出する演奏は創造だ。そして自分の鼓膜と頭蓋骨にまで届いてきた空気振動を音楽に変えて，それにさまざまな自分の感情を織り成していく聴衆も創造の喜びに浸っているのだ(たとえ意識していないとしても)。

学会という理性的な営みの中で，このような創造的な一時は得がたいものである。音楽はそれを一瞬にして実現してくれる。このような特権的な経験を，皮膚科学の研究・診療実践における直観力の手がかりとして持ち込みたいものである。この感動を与えてくれた戸倉先生，そして演奏された先生方に，心底から「ブラボー」を送りたいと思うと同時に「ありがとう！」と叫びたい。

幸野 健

(日本医科大学千葉北総病院)